

論文内容要旨

論文題目

Perceived parental affectionless control is associated with high neuroticism

(認識上の親の愛情なしの干渉は高神経症傾向と関連する)

責任講座：精神医学講座

氏名：高橋 奈那

【内容要旨】(1,200字以内)

【緒言】ParkerらはBowlbyの愛着理論の影響下に認識上の親の愛情と保護を評価するためにParental Bonding Instrument(PBI)を開発した。さらに養育様式を適正養育(高愛情、低保護)と愛情なしの干渉(低愛情、高保護)を含む3つの非機能的養育に分類した。その後の研究によればうつ病患者は親から愛情なしの干渉を受けたと認識している傾向がある。一方、高神経症傾向は確立されたうつ病発症の危険因子である。これらの所見は愛情なしの干渉型養育が神経症傾向を増加させる可能性を示唆する。本研究ではこの仮説を検証するために認識上の親の愛情なしの干渉が高神経症傾向と関連するか検討した。

【方法】対象は健常な日本人ボランティア664名であった。男性が432名、女性が232名であり、平均年齢±SDは23.4±2.2才であった。認識上の親の愛情と保護はそれぞれPBI愛情尺度と保護尺度で評価した。愛情得点と保護得点が中央値以下の場合をそれぞれ低愛情、低保護と定義し、それ以外の場合を高愛情、高保護と定義した。愛情と保護のレベルの組み合わせにより養育様式を4群に分類した。神経症傾向はNEO Personality Inventory神経症傾向尺度により評価した。統計解析は性別を共変量とした一元・二元配置分散分析とそれに続く最小有意差検定により行い、 $P<0.05$ を有意とした。本研究は山形大学医学部倫理委員会から承認されており、対象からは研究参加について文書で同意を得た。

【結果】父親の養育については愛情なしの干渉と認識している対象は適正養育と認識している対象より有意に($P=0.000$)高神経症傾向得点を示した。母親の養育についても愛情なしの干渉と認識している対象は適正養育と認識している対象より有意に($P=0.018$)高神経症傾向得点を示した。認識上の愛情なしの干渉の親の数が0、1、2と増加するにつれて対象の神経症傾向得点は有意に($P=0.000$)段階的に増加し、1名の群の得点($P=0.000$)と2名の群の得点($P=0.000$)は0名の群の得点と比較して有意に高値であった。

【考察・結論】本研究の結果は認識上の親の愛情なしの干渉が高神経症傾向と関連することを示している。ParkerらはPBIで評価した認識上の親の特徴は重要他者により評価された実際の親の特徴と良く相関すると報告している。従って本研究の結果は愛情なしの干渉型養育が被養育者の神経症傾向を増加させることを示唆する。愛情なしの干渉型養育はBowlbyにより提唱された不安型愛着を惹起する養育行動の組み合わせなので、この養育様式は不安型愛着を惹起し、高神経症傾向はその表現型であると考えられる。

1135字

平成 30 年 1 月 22 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿


学位論文審査結果報告書

申請者氏名：高橋 奈那

論文題目：Perceived parental affectionless control is associated with high neuroticism.

(認識上の親の愛情なしの干渉は高神経症傾向と関連する)


審査委員：主審査委員

白石 正 

副審査委員

石井 邦明 

副審査委員

大谷 浩一 

審査終了日：平成 30 年 1 月 19 日

【論文審査結果要旨】

認識上の親の愛情と保護を評価する方法として Parental Bonding Instrument(PBM)があり、さらに養育様式を適正養育(高愛情、低保護)および愛情なしの干渉(低愛情、高保護)に分類している。先行研究において、うつ病患者は親から愛情なしの干渉を受けたことを認識しているとの報告がある。一方、高神経症傾向はうつ病の危険因子であることが確立している。これらの所見から愛情なしの干渉型養育が神経症の傾向を増加させる可能性が示唆される。以上のことから認識上の親の愛情なしの干渉が高神経症傾向と関連するか仮説を検証するため、認識上の親の愛情と保護は PBI 愛情尺度と保護尺度で評価し点数化、神経症傾向は NEO Personality Inventory 神経尺度により評価し検討した論文である。検証の結果、以下のことが明らかとなった。

1. 父親の養育について愛情なしの干渉と認識している対象は、適正養育と認識している対象に比較して有意に($P=0.000$)高神経症傾向を示した。
2. 母親の養育について愛情なしの干渉と認識している対象は、適正養育と認識している対象に比較して有意に($P=0.018$)高神経症傾向を示した。
3. 認識上の愛情なしの干渉の親の数が 0、1、2 と増加に伴い対象の神経症傾向が有意に($P=0.000$)段階的に増加した。
4. 1名の群の得点($P=0.000$)と 2名の群の得点($P=0.000$)は、0名の群の得点と比較して有意に高値であった。

以上のことから、これまで研究がなされていなかった認識上の親の愛情なしの干渉が高神経症傾向と関連することを明らかにしたものである。研究の立案、方法、解析がよくなされており、本審査委員会では博士論文にふさわしいと判断し合格とした。